

平成 30 年 8 月 31 日現在

機関番号：34514

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03109

研究課題名(和文) 福島原発事故により長期的な避難生活をおくる子どもの福祉・教育課題への学際的研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary Study on Social-Welfare and Education Problems of Long-term Evacuee Children Caused by Nuclear Power Accident in Fukushima

研究代表者

戸田 典樹 (TODA, NORIKI)

神戸親和女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：70584465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：研究結果は、著作として「福島原発事故 - 漂流する自主避難者たち - 実態調査からみた課題と社会的支援のあり方」、福島原発事故、取り残される避難者 直面する生活問題の現状とこれからの支援課題」を出版した。また、報告書として「チェルノブイリ原発事故30年に学ぶ - ウクライナ原発事故被害者への聞き取り調査 -」、研究紀要「福島第一原子力発電所事故による避難生活の問題」、「阪神・淡路大震災22年に学ぶ」、「福島原発事故後6年に学ぶ」、「福島原発事故により避難した子どもたちへの学習支援及び遊び支援に関する研究2016」を作成した。さらには、学会発表、書評報告などを実施した。

研究成果の概要(英文)：Outputs of the Research Projects are many presentations in academic conferences, and publications as follows:
Books 1.Toda, Noriki (ed.), Drifted Evacuees after the Nuclear Meltdown Accident in Fukushima: Problems and Necessity of Social Supports extracted from Field Survey, Tokyo: Akashi-shuppan, 2016, pp.202 (in Japanese).2.Toda, Noriki (ed.), Evacuees Left Behind after the Nuclear Meltdown Accident in Fukushima: Problems and Necessity of Supports in their Life. Tokyo: Akashi-shuppan, 2018, pp.248 (in Japanese).
Research Article 3.Toda, Noriki (ed.), What we can learn from the experiences of thirty years after the Nuclear Meltdown Accident in Chernobyl: Based on Interview Research to Victims in Ukraine, March 2016, pp.145 (in Japanese).4.Toda, Noriki (ed.), Rethinking evacuees from the Nuclear Meltdown Accident in Fukushima based on the interviews to victims in the Nuclear Meltdown Accident in Chernobyl and Hanshin-Awaji Big Earthquake, March 2017, pp.102 (in Japanese).

研究分野：子ども学(環境)

キーワード：福島原発事故 被災者支援 自主避難 東日本大震災 阪神・淡路大震災 チェルノブイリ原発事故
子どもの居場所 教育と福祉の学際的研究

1. 研究開始当初の背景

長期化する東京電力福島第一原子力発電所事故(以下、「原発事故」という。)による避難生活が引き起こすコミュニティや家族の機能の崩壊、さらにこれらが「原発いじめ」、「原発離婚」などという二次被害を引き起こしている。私たちの研究チームは、これまで大熊町、楢葉町、自主避難者家族の会などの子どもが、仮の住処で生活することにより「取り残され感」や「置きさられ感」など精神的不安を抱えていることを明らかにしてきた。

このため、教育委員会、NPO法人などと協力して子どもを対象とした「学習支援」や「遊び支援」の支援の必要性を強調してきた。

しかし、原発事故被災者への支援は、自主避難者への住宅支援の終了などを象徴的な事例として廃止、縮小という状況に進んできた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、調査研究をとおして、福島原発時により長期的な避難生活をおくる子どもが抱える福祉・教育課題を明らかにし、支援のあり方を学際的に検討することにある。

原発事故後、一定の期間が経ち被災者の多くが着実に生活再建を進めている。しかし、一方で、未だ不安定な状況で生活する家族が存在する。それは取り戻すことのできない大切な時期を放射性物質の影響に不安を抱えながら仮の住家で生活を送る福島の子どものである。

阪神・淡路大震災の経験は、避難生活の長期化が孤立、孤独死を生み出す重要な要因であることを鮮明にした。このため10年後、20年後、原発事故により避難する家族、とりわけ子どもに大きな影響を与えるのではないかという問題意識を持った。このため長期化する避難生活が第一に阪神大震災、チェルノブイリ原発事故などにおいて被災者にどのような影響を与えたのか、第二に長期化する避難生活が子どもに与えるだろう困難の兆候を調査することの必要性を感じた。

その調査結果から子どもたちがたくましく生き抜くことを支援することができる福祉・教育など学際的な視点から具体的な社会的支援について提起したいと考えている。

3. 研究の方法

本研究は、3つの調査とその分析により構成される。まずは、阪神・淡路大震災、チェルノブイリ原発事故という二地域における避難生活について調査を実施した。その理由は、まず阪神・淡路大震災における被災者が高齢者や障がい者など社会的弱者に孤独死が多発していることである。災害後20年を経ても孤立、孤独という問題が解決されていないからである。

さらに原発事故は、放射線被害を生み出し、子どものことを考えて避難生活が進められ、

多くの障害、困難と遭遇する。このため社会政策、経済学、教育学、行政学など学際的な研究アプローチから社会的支援策構築に向けて調査、分析を行った。

調査・分析は、次のとおり実施した。

1. 避難生活の長期化が及ぼす福祉・教育課題についての調査：阪神大震災、チェルノブイリ原発事故における避難者の課題を調査した。

2. 長期化する避難生活をおくる子どもやその家族の福祉・教育課題についての実態調査：支援団体、被災者団体への聞き取り調査を実施した。

3. 長期化する避難生活をおくる子どもやその家族への支援策についての提言：阪神淡路大震災、チェルノブイリにおける支援活動の経験と現状の支援策の課題を踏まえ改善策を提示する。

4. 研究成果

避難生活の長期化が及ぼす福祉・教育課題についての調査、長期化する避難生活をおくる子どもやその家族の福祉・教育課題についての実態調査をもとに次のような研究成果を得た。

2015年度には、明石書店から自主避難者の避難生活の実態を綴った「福島原発事故、漂流する自主避難者たち—実態調査からみた課題と社会的支援のあり方—」を出版した。

ここでは、避難指示を受けていない地域、例えば、福島市や郡山市などから「自主避難」する家族が、避難元や避難先から批判や興味の目にさらされていること。さらには、例えば不登校となった子どもや転職を余儀なくされた父親(夫)を苦しめているという母親(妻)の自責の念という自主避難者の三重苦について報告し、多様な避難生活の在り方を認めることの必要性を強調した。

2016年度には、第64回日本村落研究学会において福島原発事故とチェルノブイリ原発事故を比較検討したシンポジウムを行った。発表者は、研究代表者戸田典樹と研究分担者河村能夫、大友信勝、田中聡子、研究協力者渡部朋宏の計5名だった。内容は、福島原発事故で避難生活を余儀なくされている楢葉町町民に対するアンケート調査を報告したもの、チェルノブイリ原発の被災者のインタビュー調査を分析したもの、福島原発事故とチェルノブイリ原発事故との被災者のインタビューを比較したもの、福島原発事故被災者に対する支援における問題点を構造的に捉えようとしたものである。

2017年度には、明石書店から原発事故避難者の支援課題を綴った「福島原発事故取り残される避難者 直面する生活問題の現状とこれからの支援課題」を出版した。

ここでは、避難してきた子どもに対するいじめの問題、避難指示が解除された町に戻らない自治体職員に対する昇格・昇給停止問題、避難する子どもに対する学習支援・遊び支援

の継続に向けての課題、阪神・淡路大震災での借り上げ災害復興公営住宅入居者に対する退去命令などの問題を取り上げている。そして、日本の復興支援策の特徴を、災害における被災者を極めて特定の者に「限定化」し、支援（補償）を実施しないという方針がとられていること。「限定化」を進め、他に支援（補償）を求めることを極めて個人の志向、考え方の違いに矮小化していること。支援対象を「限定化」した後、さらに意識的に支援（補償）を細分化させ、被災者同士を「分断」させること。復旧、復興を強調することで支援（補償）の「責任を果たしたこと」を強調することである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

田中聡子・戸田典樹「福島第一原発事故による避難生活の問題」神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要第13号 117-125

大友信勝「時代の課題と学問的テーマ社会福祉研究の立場から」聖隷クリストファー大学社会福祉学会・学会通信 1-3

戸田典樹「文献紹介 3.11 東日本大震災と『災害弱者』」社会福祉学 58-1 巻 178-178

〔報告書〕(計6件)

戸田典樹、田中聡子、大友信勝、河村能夫「チェルノブイリ原発事故 30 年に学ぶ ウクライナ原発事故被害者への聞き取り調査」eブックメイン 145

戸田典樹編「阪神・淡路大震災 22 年に学ぶ」eブックメイン 101

はじめに 戸田典樹「阪神・淡路大震災後 22 年の経験に学ぶ」1-2

第1章 梶山卓司「阪神・淡路大震災以降の復興支援策の到達度と課題」3-16

第2章 権 順浩「生活復興にかかわる研究の到達点と課題」17-25

第3章 戸田典樹、深澤茂俊「阪神・淡路大震災から 22 年を経た被災者支援を考える - 借り上げ復興公営住宅」退去問題に焦点をあてて - 」26-41

第4章 藤原伸夫「阪神・淡路大震災における『神戸市障害者緊急ケアセンター』の取り組み」42-57

第5章 門 道子「阪神・淡路大震災の検証 精神科救護所の活動を中心に - 」

第6章 勝木洋子「絵本・児童書から見た震災と防災学習」67-76

第7章 伊藤泰三「人口減少下での災害福祉対策のあり方 - 高齢者見守り対策を中心に - 」77-87

戸田典樹編「福島原発事故 6 年に学ぶ」eブックメイン 50

はじめに 戸田典樹「長期的な避難生活を

おくる子どもの福祉・教育課題について」1-3

第1章 渡部朋宏「福祉原発事故避難の実態と「住民」概念の転換 檜葉町を事例に - 」4-23

第2章 江川和弥「避難した子ども同士の共生とコミュニティの課題 - 大熊町地域学習応援協議会の4年間の挑戦 - 」24-33

第3章 戸田典樹「『学習支援』『遊び支援』からみた子どもの『居場所』についての福祉・教育における学際的研究 - 福島原発事故により避難生活をおくる大熊町の子どもの支援から考える - 」34-49

おわりに 戸田典樹「福島の実態を明らかにしたいと考えて」

戸田典樹編「チェルノブイリ原発事故被災者と阪神・淡路大震災被災者のインタビュー調査から福島原発事故避難者を考える」eブックメイン 102

はじめに 河村能夫 1-2

第1章 渡部朋宏「福島原発事故避難の実態と新たな課題 - 檜葉町を事例に - 」

第2章 田中聡子「原発被災者の長期的支援の必要性 - チェルノブイリ原発事故被災者のインタビュー調査を通して - 」14-36

第3章 戸田典樹「長期的避難生活をおくる子どもの福祉・教育課題 - 福島原発事故とチェルノブイリ原発事故のインタビュー調査から - 」37-50

第4章 大友信勝「福島原発事故避難者問題の構造とチェルノブイリ事故」

第5章 戸田典樹「阪神・淡路大震災後 22 年にみる住宅政策の課題 - 『借り上げ復興公営住宅』入居者退去問題に焦点をあてて」61-76

おわりに 戸田典樹 77-78

戸田典樹、深澤茂俊「福島原発により避難した子どもたちへの学習支援に関する研究 2016」eブックメイン 84

戸田典樹、深澤茂俊「福島原発により避難した子どもたちへの学習支援に関する研究 (2016 復興支援版)」eブックメイン 29

〔学会発表〕(計2件)

第64回日本村落学会シンポジウム

コーディネーター 河村能夫

報告者

渡部朋宏「福島原発事故避難の実態と新たな課題 - 檜葉町を事例に - 」

田中聡子「原発被災者の長期的支援の必要性 - チェルノブイリ原発事故被災者のインタビュー調査を通して - 」

戸田典樹「長期的避難生活をおくる子どもの福祉・教育課題 - 福島原発事故とチェルノブイリ原発事故のインタビュー調査から - 」

大友信勝「福島原発事故避難者問題の構造とチェルノブイリ事故」
山口萩市セミナーハウス

Asia-Pacific Social Science Conference
伊藤泰三「Community Emergency measures in a time of population decline」 Kyoto

〔図書〕(計 2 件)

戸田典樹編著「福島原発事故 漂流する避難者たち-実態調査からみた課題と社会的支援の在り方」明石書店 202

戸田典樹「放置できない自主避難者問題」12-26

辻内琢也「大規模調査からみる自主避難者の特徴 - 「過剰な不安」ではなく「正当な心配」である」27-64

伊藤泰三、河村能夫「自主避難者の今 何が困難を引き起こしているか アンケート調査よりの分析」65-101

田中聡子「漂流する母子避難者の課題」102-114

田中聡子「子どもの安全、安心な未来のため親としてできること」115-138

渡部朋宏「子どもの未来、家族の幸せを願って」139-148

渡辺成子「知ってほしい、考えてほしい福島の実現」149-155

渡部朋宏「限定される自主避難者の損害賠償」156-168

大友信勝「自主避難者への社会的支援」169-195

戸田典樹編、江川和弥、出口俊一、田中聡子、大友信勝、津久井進「福島原発事故 取り残される避難者 直面する生活問題の現状とこれからの支援課題」明石書店 250

辻内琢也「原発避難いじめの実態と構造的暴力」14-57

渡部朋宏「檜葉町に見る自治体職員の生活実態と新たな課題 - 帰還できる町・檜葉町 - 」58-74

出口俊一「『借上公営住宅』の強制退去問題を考える」92-119

戸田典樹「阪神・淡路大震災 22 年にみる住宅政策の課題 - 『借上公営住宅』入居者退去問題に焦点をあてて」120-137

田中聡子「原発被災者の長期支援の必要性 - チェルノブイリ原発事故被災者のインタビュー調査を通して」138-156

戸田典樹「長期的避難生活を送る子どもを抱える家族への支援を考える」157-189

大友信勝「福島原発事故避難者問題の構造とチェルノブイリ法」190-207

津久井進「避難者の実質的生活補償へ」208-221

大友信勝・戸田典樹「米山隆一新潟県知事インタビュー 原発事故、その影響と課題」22-244

6. 研究組織

(1)研究代表者 戸田典樹 (Toda Noriki)
神戸親和女子大学・発達教育学部教授
研究者番号：70584465

(2)研究分担者 大友信勝 (Otomo Nobukatsu)
聖隷クリストファー大学・社会福祉学研究科教授

研究者番号：50085312

研究分担者 河村能夫 (Kawamura Yoshio)
龍谷大学・REC 研究員

研究者番号：10121625

研究分担者 田中聡子 (Tanaka Satoko)
県立広島大学・保健福祉部 (三原キャンパス) 教授

研究者番号：30582382

研究分担者 辻内 琢也 (Tujuchi Takuya)
早稲田大学・人間科学学術院教授

研究者番号：7059259

研究分担者 深澤茂 (Fukasawa Shigetoshi)
神戸親和女子大学・発達教育学部教授

研究者番号：00367088

研究分担者 梶山卓司 (Kajiyama Takuji)
神戸親和女子大学・文学部教授

研究者番号：10717656

研究分担者 勝木 洋子 (Katsuki Yoko)
神戸親和女子大学・発達教育学部教授

研究者番号：**30083059**

研究分担者 藤原伸夫 (Fujiwara Nobuo)
神戸親和女子大学・発達教育学部教授

研究者番号：**30733852**

研究分担者 門 道子 (kado michiko)
神戸親和女子大学・発達教育学部准教授

研究者番号：**40758900**

研究分担者 伊藤 泰三 (Ito Taizo)
福山平成大学・福祉健康学部准教授

研究者番号：20585632

研究分担者 権 順浩 (Kuwon Sunfo)
神戸親和女子大学・発達教育学部講師

研究者番号：**70758614**

(3)連携研究者 特になし

(4)研究協力者

江川和弥 (Egawa Kazuya)

津久井進 (Tsukui Susumu)

出口俊一 (Deguchi Tosikazu)

渡部朋宏 (Watanabe Tomohiro)